様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　4 月 19 日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2009
課題番号：20730108
研究課題名（和文）　近現代フランスにおけるレイシズムの思想史的研究

研究課題名（英文）　A Study of History of Racism in Modern France

研究代表者
長谷川　一年（HASEGAWA KAZUTOSHI）
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：00399049

研究成果の概要（和文）：二年間の「近現代フランスにおけるレイシズムの思想史的研究」を通じて、以下のことが明らかになった。旧来型の「同化志向」のレイシズム（植民地主義を帰結する）に代わって、今日の新しいレイシズムは「差異志向」であり、「差異への配慮」を偽装しつつ、実際には排外主義（具体的には移民排斥）を帰結している。その思考様式の原型はすでに 19 世紀フランスのレイシズムに見られ、ある意味で 20 世紀フランスはそのロジックを再現していると言うことができる。

研究成果の概要（英文）：In this research, I analyzed historical transformation of racism in modern France. As a result, I pointed out that the old biological racism was substituted for a new type of racism, which is based upon the difference of cultures, and that a logic of new racism can be observed in 19th century France.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：政治学
科研費の分科・細目：政治学・政治思想史
キーワード：レイシズム、フランス、 政治学、思想史

１．研究開始当初の背景

（１）冷戦崩壊以降に噴出している民族紛争や文化摩擦は、近代の国民国家が前提としてきた「一国家＝一民族＝一文化」という枠組みの無効性を示しているように思われる。今日の国家は、多かれ少なかれ「多民族」国家であり、「多文化」国家であると言うべきだろう。こうした状況のなかで、世界中で新しい形態の人種差別主義（レイシズム）が出現している。

今日のレイシズムは、もはや生物学的特徴（皮膚の色、頭蓋の形、髪の毛の性質など）に依拠することなく、他者の文化的特徴（宗教や生活様式など）を不変的属性と見なした

うえで、「共存不可能な他者」というレッテルを貼り付けていることから、E・バリバールにならって、これを「人種なきレイシズム」として分析することもできるだろう（E・バリバール、I・ウォーラーステイン『人種・国民・階級』）。

（2）一般に、ヨーロッパやアメリカでは、レイシズムに関する研究は相当の蓄積があり、L・ポリアコフによる「ユダヤ人差別」に関する大著（『反ユダヤ主義の歴史』）や、T・トドロフによる「フランスにおける他者像」の研究（『われわれと他者』）などは、すでに必読の古典的研究に属すると言ってよい。

しかし、西欧の研究者が自国のレイシズムを研究する場合、彼らがほとんど無意識のうちに陥ってしまいがちな「自己検閲の罠」という問題がある。すなわち、合理主義こそ西洋近代の思想史上の本流であると前提しているために、今日の極右勢力に見られるような排外主義は一種の「例外状況」として処理されやすく、若干のマイナーな思想家を「悪の元凶」として指弾することによって、自国の思想史的伝統は無傷のまま救済されてしまうのである。

（3）こうした事情からして、わが国において西欧のレイシズムを研究することは、その視点の自由さにおいて利点があるように思われた。実際、国内のレイシズム研究の代表的なものとして、竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う』（人文書院、2005 年）があるが、これは人文科学と自然科学の研究者が協働した包括的研究であり、欧米における諸研究に引けを取らない水準に達している。しかしながら、同書において、さまざまな視角から差別現象が検討されているにもかかわらず、レイシズムを生み出す思想史的基盤に関する分析が欠落していることからも分かるように、わが国ではレイシズムをひとつの「思想」として捉える試みが少なかったことは間違いない。

（4）本研究は、以上のような国内外の研究動向にかんがみて、既存の研究の欠落を補うと同時に、現代のさまざまな差別現象を分析・批判するための理論的基礎を提供しようという動機から開始されたものである。

2．研究の目的

以上のような学術的背景を踏まえて、本研究は以下の三つの目的を追求するものであった。

（1）西洋政治思想史上、どのような人種に関する言説が産出され、いかなるかたちで受容されてきたのか、とりわけ大革命以降の近現代フランスにおけるレイシズムの思想史的伝統がいかに形成されてきたのかを明らかにすること。

言い換えれば、従来の西洋政治思想史を、「人種差別」というプロブレマティックをはらんだ「政治的言説」の総体として捉えなおすことによって、これまでのオーソドックスな思想史研究が見落としてきた側面を浮かび上がらせること。

（2）現在のヨーロッパ諸国におけるレイシズム、とりわけイスラーム系移民に対する排外主義的な言説と運動が、どのような理論武装によって正当化されているのか、またそこではレイシズムの思想史的伝統が、どのように変容し、消費され、影響を与えているのかを解明すること。

そうすることによって、今日のヨーロッパ諸国におけるイスラーム系移民への排斥圧力が、たんなる一過性の現象ではなく、いわば近代ヨーロッパにビルトインされた精神構造と深くかかわっていることを明らかにすること。

(3) こうした議論をより一般化して、「他者との共生はいかに可能か」という問題に、政治思想史研究の視角から切り込み、そのようにして得られた知見によって、不可避的に「多文化」化しつつある現代日本の諸問題にも何らかの示唆を与えること。

より具体的に言えば、たとえばフランスの移民とわが国におけるニューカマー（およびその子どもたち）の抱える問題を比較検討するための、議論の基盤を整備すること。

3．研究の方法

（1）本研究の方法としては、まず近代思想史上の一次資料を収集し、レイシズムの観点から読解を行うことになる。具体的には、J・ミシュレ、A・ゴビノー、E・ルナン、G・ル・ボン、G・ソレル、M・バレスといった、19 世紀から 20 世紀初頭にかけての歴史家・思想家などのテキストをできるだけ精密に読み解くことに時間を費やした。彼らのなかには、フランス本国はもとより、わが国でも一定の研究蓄積のある思想家も存在するが、レイシズムの視角から接近した研究は多くないため、このような接近方法は意義を有するものと思われる。

（2）一次資料の読解と並行して、フランス思想史におけるレイシズムを対象とした二

次文献を渉猟・読解することが重要である。とくに近年のフランスでは、第三共和政期における諸学（社会学、歴史学、生物学など）の発展とレイシズムの関連を扱った研究が充実してきており、また最終的にドレフュス事件を帰結する反ユダヤ主義の研究はすでに汗牛充棟の観があるが、それらフランス本国での研究を十分に消化する必要がある。

（３）また平成 20 年度（2008 年度）には、フランスおよびドイツにて資料収集を行い、①Ａ・ゴビノーとドイツ思想界との関係、②サルコジ政権以後のフランスにおけるレイシズム（とりわけ移民に関する各種規制、右翼勢力の排外主義の動向）に関して文献を渉猟した。これはレイシズムをたんに理論的・思想的に検討するのみならず、その現代的諸形態を分析するための準備作業の一環である。

４．研究成果

本研究の成果として、とくに以下の二点に言及しておきたい。

（１）19 世紀フランスにおけるレイシズム、なかでもゴビノーの人種理論（『人種不平等論』）が、今日においても新しい文脈のもとでそのロジックを再生産させていることを明らかにした。ゴビノー的思考様式の中心は、異人種間の混交を峻拒する「差異主義」にあるが、その現代的展開の一例として、「20 世紀最高の知性」の一人とも言われる文化人類学者、Ｃ・レヴィ＝ストロースの言説を取り上げた（論文「レヴィ＝ストロースとゴビノー――レイシズムをめぐって」、『思想』、岩波書店、1016 号、2008 年）。

「文化相対主義」の提唱者として世界的に著名なこの人類学者が、『人種不平等論』の熱心な読者であり、みずからの著作やインタヴューのなかで、しばしばゴビノーを称賛していることは、あまり知られていない。両者の思想的連関を正面から論じた研究は、管見のかぎりでは、国内外を問わず存在しなかった。

なにゆえにレヴィ＝ストロースはゴビノーの思想を高く評価するのか。ゴビノーは同時代のフランスのナショナリズムや植民地主義的な拡張志向を批判的に眺めていた。その根底にあったのは、一言でいえば、他者との接触（「混血」）によって「人種の平等化」が進行することへの恐怖である。ゴビノーの言説は生物学的な語彙に満たされているが、私見によれば、同じ現象を「文化」の概念で語ったのがレヴィ＝ストロースである。すなわち、グローバル化時代における文化の均質化に対して、「文化相対主義」を理論的武器に、文化の差異・多様性を擁護しようとしたのである。

このようにして、「人種」と「文化」、あるいは「不平等」と「差異」が通底するかたちで、ゴビノーとレヴィ＝ストロースが結ばれてしまう「差異主義的レイシズム」のロジックを確認することができた。

（２）レイシズムの歴史的・思想史的研究と並行して、現代ヨーロッパにおける「人種差別」の発現形態について研究を進めた。その成果の一端として、論文「新自由主義――市場原理主義と国家の変容」を執筆し（『歴史・思想からみた現代政治』法律文化社、2008 年、所収）、さらにその内容を敷衍して、「新自由主義時代における国家／権力の変容」と題する学会発表を行った（日本国際文化学会、2009 年 7 月 5 日、於・佐賀大学）。

1980 年代以降、「ゆりかごから墓場まで」と言われた福祉国家が財政的に破綻し、いわゆる「新自由主義（ネオ・リベラリズム）」の思想ならびに政策が世界を席巻していった。それは第一義的には経済政策の転換を意味するが、それとともに重要なのは、権力の様態の変容である。かつてＭ・フーコーが定式化した「規律＝訓練（ディシプリン）」に代わって、Ｇ・ドゥルーズの示唆した「管理（コントロール）」ないし「監視」が権力のモードとして浮上してきたのである。

それはポスト福祉国家・ポストフォーディズムの時代にふさわしく、「自己責任」を基調とし、人口の流動性ないし生そのものの流動性を前提にしながら、共同体の構成員をコントロールする権力である。もはや権力は、人々に規範の内面化を強制するのではなく（それは途方もない「コスト」を必要とするだろう）、その行動の外面的形式に関心を集中させ、「リスク」の類型化をはかる。その結果、たとえば「20 歳代、男性、無職」は要注意人物としてプロファイルされるというわけである。こうして人口の上に引かれた新しい境界線は、狭義の人種のみならず、宗教・文化・階級・出身地による差異化をとおして、特定の人々を内側に囲い込み（たとえばアメリカにおける「ゲイテッド・コミュニティ」）、あるいは外側に排除する（たとえば、ヨーロッパにおけるイスラーム系移民への排外圧力）。

このような発想の基盤ないし原型として、19 世紀から 20 世紀初頭にかけてのフランスのレイシズムを捉えることができるだろう。もちろん、ナチス・ドイツを通過した現在、生物学的な人種概念を持ち出すのはある意味でタブーとなったが、文化的概念としての人種に重心を移しながら、依然としてレイシズムは延命している。19 世紀において醸成さ

れた反ユダヤ主義がドレフュス事件において頂点を迎えたように、一世紀後のヨーロッパ・アメリカは主要なターゲットをイスラームに絞り込みながら、レイシズムを反復しているのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①長谷川一年，「レヴィ＝ストロースとゴビノー――レイシズムをめぐって」，『思想』1016 号，209-228 頁，2008 年，査読無

〔学会発表〕（計１件）
①長谷川一年，「新自由主義時代における国家／権力の変容」，日本国際文化学会，2009 年 7 月 5 日，佐賀大学

〔図書〕（計１件）
①長谷川一年，法律文化社，『歴史・思想からみた現代政治』, 2008 年, 3-34 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
長谷川　一年
（HASEGAWA　KAZUTOSHI）
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：00399049